



第1部

理論編



第1章 キャリア発達とは

1 キャリアの意味

我々は日常生活で「キャリア」という言葉を聞くと、「キャリア官僚」ですとか、「あの人はキャリアが長い」「キャリアアップ」といったように、どこかエリート的な印象を抱きがちではないでしょうか。そのような印象から、キャリア教育という言葉を知ると、就職のための教育と捉えがちですが、一概にそういうわけでもありません。まずはキャリアの語源から辿っていき、キャリア発達とは一体何なのかを明らかにしたいと思います。

(1) キャリアの語源

キャリアの語源はラテン語の *carrus*（荷車）で、車が道をずっと走っていくような「続くもの」という考え方・状態を指すそうです。キャリアを訳そうとした専門家たちは「経歴」「進路」「職業」という言葉を当てたそうですが、意味が限定されてしまって、しっくりこなかったため、キャリアという言葉をもとに用いるようになったそうです。

(2) キャリアの定義

ここで言うキャリアという言葉の意味するところは、中央教育審議会の答申でこのように述べられています。

人は「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが「キャリア」の意味するところである。

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（H23年1月）より一部抜粋

簡単に解釈すると、「キャリアとは生涯において個人が役割を果たす中で積み重ねていくもの」と言えます。学校、家庭、職場など、様々なシーンで自分の役割を果たす経験、そこでの成功や失敗の経験を繰り返すことで積み重なっていくものは、物事の見方や捉え方、向き合い方といった目に見えにくいものではないでしょうか。これがキャリアです。キャリアは、誰にでもあるものです。

(3) キャリアは発達・変化する

個々のキャリアは、生涯にわたって様々な役割を通して、環境との相互作用により発達・変化するものです。なぜなら、「子ども」の時代には、子どもとして家庭の中での役割や学校の中での役割があります。そして、そこで積み重ねたキャリアをもとに成長し、「社会人」となります。また、社会人になったら社会人として職場の中での役割もありますが、入社1年目と10年目とではおそらく役割も異なるでしょう。さらに、独立したときや結婚したときなどは、家庭における役割も変化します。このように、加齢や自分の置かれる立場、人的・物的環境とともに自分が果たすべき役割が変わっていき、その都度経験を積み重ねることで、キャリアは発達・変化していきます。そうして「自分」がつくられ、働くことを含めて生きることを意味するのである。

2 キャリア発達とキャリア教育

当然ながら、「キャリアを発達させることがキャリア教育である」と言えます。しかし、「キャリア」という言葉が耳慣れないうちは、何か新しい取り組みをしなければいけないのかという先入観を抱きがちです。これまでも特別支援教育ではキャリア教育がなされてきているはずですので、改めて「こういう視点に立って意識して取り組んでいこう」というくらいの気持ちでいる方がよいかなと思います。

(1) キャリア教育・キャリア発達の定義

これらの言葉は順に、中央教育審議会の答申でこのように述べられています。

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（H23年1月）

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（H23年1月）

少々堅苦しいので、本校では新入生の保護者に次のように説明しています。

車に乗っている人は、お子様を示しています。お子様一人一人が自分のやりたいことに合った車に乗り、自分に合った進路を、周りの大人と相談しながら最終的には自分で選び、夢や希望や目標といった目的地を自分で見つけながら、豊かに人生を歩んでいく…という力が身についていくこと、この成長のことをキャリア発達といいます。それを促すような教育活動のことを、キャリア教育といいます。



(2) キャリア発達を促す教育とは

もっと簡単に言えば、キャリア教育とは「自分らしい生き方を身につけさせる教育」と言えるのではないのでしょうか。キャリアを積み重ねさせる、キャリアを発達・変化させるのは、そのことを意図的・計画的にねらった授業や指導であり、その学校の教育課程そのものです。単に教科書の内容を順番に教えていればいいというものでも、通り一辺の進路指導（いわゆる出口教育）をしていればいいというものでもありません。

机上学習においても、校外学習においても、日常の様々な経験（教育活動）を通じて、今やっていることが次につながっているという感覚、前やったことが今役に立っているという実感を持たせることができれば、その子のキャリアは発達します。そして、変化の激しい時代を生きていく上でも、自分で自分のことを考えて道を選び、進むことができる人に育っていくことでしょう。これをねらって、本校では「協同学習」に注目しました。

第2章 キャリア発達を促す協同学習

現代は変化の激しい時代です。グローバル化やIT化が進み、社会の政治・経済・文化・産業などがどんどん変化していきます。そんな時代を生き抜くためには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層求められることになります。つまり、新しい知識・情報・技術を身に付けるとともに、それを場面や状況に合わせてうまく使いこなす力が必要になってきます。

こうした時代背景を受けて、学習指導要領では「生きる力」を育むことが求められてきました。これは「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力など」とされています。つまり、自らの人格を磨き、豊かな人生を送るために不可欠な発達を促すようにすることであると捉えることができます。

そんな中、キャリア教育という考え方が重要視されるようになりました。先述したように、キャリア教育は、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことを促す教育です。まさに「生き方を身につけさせる教育」すなわち「生きる力を育む教育」と言えるでしょう。

その教育手法の一つとして、本校では協同学習に注目しました。協同学習は、学級を学びの共同体（ラーニング・コミュニティ）として組織し、話し合いや助け合いを中心に授業をする方法で、アクティブ・ラーニングの一つ、あるいは主体的・対話的で深い学びを実現する一つの手法とも言えます。これを行うことで、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決すること、他人とともに協調することで豊かな人間性を育むこと、自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を身につけさせることにつながると考えています。

様々な研究者が「協同学習について」と紹介していますが、最も分かりやすそうなものからポイントを抜き出し、以下にまとめました。

協同学習とは

- ・ 学習参加者が相互に学び合う授業
- ・ 話し合いや助け合いを中心とした授業
- ・ 共通の問題解決を目指して互いの考えを出し合い、学習内容の理解・習得を目指す

協同学習によって、学習内容の理解・習得を促進するというねらいもありますが、ねらいはそれだけではありません。協同学習は「一つの指導技法であるという枠にとどまらず、協力・協働に価値を置く教育理念」でもあると言われています。仲間との話し合いを繰り返すことでコミュニケーションの方法を学び、仲間と協力・協働して課題を解決していくという手段・方法を身につけていくうちに、仲間と共に何かをすることに対して価値を見出し、やがて主体的に学ぶ（取り組む）という意欲・姿勢を高めていくことができると期待できます。

つまり、協同学習を行うことで、教科的な知識・理解を深めさせるだけではなく、協同で学ぶ（取り組む）意義に気付かせ、協同で学ぶ（取り組む）方法を身につけさせることもできます。このように、仲間と力を合わせて問題を乗り越える力を育てることもつながるのです。こうした力は、変化の激しい現代社会において、進学・就労後の人生を歩むにあたって必要な能力の一つ、すなわち「キャリア」とも言えるでしょう。そう考えると、協同学習を行うことは、キャリア発達を促す教育方法の一つであると捉えることができます。

協同学習を行うねらい

（協同学習の効果として期待されること）

